

2025年度

第1回一般入試

時間50分 100点満点

国語

受験上の注意

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
2. 実施時間は50分で、100点満点です。時間配分に注意して解答してください。
3. 解答は解答用紙にていねいに記入してください。
4. 解答用紙・問題用紙両方に、受験番号、座席番号、名前を記入してください。座席番号は、机に貼ってある番号のことです。
5. 試験中は携帯電話の電源を必ず切ってください。
6. 私語や物の貸し借りなどは認めていません。困ったことがある場合は、手をあげて先生に相談しその指示に従ってください。

受験番号 _____ 座席番号 _____

名 前 _____

聖学院中学校

□ 一 次の間に答えなさい。

問一 ——— のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① 選手の力走が人々のムネを打った。 ② 夕焼けで西の空が赤くソまる。
③ 物語の感想をカ／＼ケツに述べる。 ④ きれいなシ／＼セイをたもつ。

問二 次の(A) ～ (C) にはそれぞれ同じ言葉が入ります。空欄に入るもつともふさわしい語を後の選択肢から選び、記号で答えなさい。

- ①
・あなたがいくら優しい心の持ち主でも(A) がともなっていないければ自分の思いを十分に相手に伝えることができません。(ヘレンケラー)
・じっくり考えろ。しかし、(A) する時が来たなら、考えるのをやめて、進め。(ナポレオン一世)

- ②
・(B) だから笑っているのではない。むしろぼくは、笑うから(B) なのだ。(アラン)
・私たちは(B) になることを目的に生きています。私たちの人生は一人ひとり違うけれど、されど皆同じなのです。(アンネ・フランク)

- ③
・他人を本気で理解する唯一の方法は(C) をすることです。本気で自分の主張をしあうとき、真の人格が見えてくるのです。(アレン・フランク)
・自分自身の向上を心がけている者は、(C) などするひまがないはずだ。(リンカーン)

ア、学問 イ、けんかう、行動 エ、幸福 オ、余裕

二 雨が降りしきるある夜中、生まれたばかりの子犬がクンクン泣きながら「私」の家の門に入ってきました。かわいそうに思った「私」は、母に頼み込んでこの犬を飼うことを許してもらいます。本文はそれに続く場面です。次の文章を読んで後の問いに答えなさい。（設問の都合上、原文の漢字表記の一部をひらがなにしています）。

ポチは日増しにメキメキと大きくなる。大きくはなるけれど、A まで一向にねんねえで、垣の根方に大きな穴を掘って見たり、下駄を片足門外へくわえ出したり、そんないたずらばかりして喜んでいる。

それに非常に人懐こくて、門前を通掛りの、私のような犬好が、気紛れにチョツチョツと呼んでも、すぐともう尾をふって飛んで行く。まして家へ来た人だと、だれかれのみさかいはない、皆に喜んで飛付く。初ての人は驚いて、子供なんぞは泣出すこともある。すると、ポチはびつくりしてそのかおを視ている。

人でさえこれだからB 同類は尚恋しがる。犬が外を通りさえすればきつと飛んで出る。喧嘩するのかと、私がハラハラすれば、喧嘩はしない、唯さかんに尻尾をふって鼻をかぎあう。大抵の犬は相手は子供だという面をして、さっさと行くとうとする。どっこいとポチがおツかけてふざけかかる。うるさいと言わぬばかりに、先の犬は齒をむいて叱る。すると、ポチは驚いて耳を伏せて逃げて来る。

ポチはこんな無邪気な犬であったから、友達はじき出来た。

友達というのは黒と白との二匹で、いずれもポチよりは三ツ四ツも年上であった。C 歴とした家の飼い犬でありながら、品性の甚だ下劣な奴等で、毎日々々朝から晩まで近所の掃溜（※1）をあさり歩き二度の食事の外の間食ばかりむさぼつ

ている。以前から私の家の掃溜へもよくたちまわって来て、なじみの犬共ではあるけれど、ポチを飼うようになってからは、尚頻繁にたちまわって来る。ポチのたべあましを食いに来るので。

ポチはD大様だから、よその犬が自分の食器へ首を突込んだとて、怒らない。黙って快く食わせて置く。が、他の食うのを見て自分も食気づく時がある。そんな時には例の無邪気で、うっかりそばへ行って一緒に首を突込もうとする。無論先の犬は、馳走になつてゐる身分を忘れて、大いに怒って叱付ける。すると、Eポチは驚いてとびのいて、不思議そうに小首をかしげて、そのガツガツと食うのを黙って見ている。

父は馬鹿だと言うけれど、馬鹿氣て見える程「F」なのが私はかわゆい。尤も後には悪友の悪感化を受けて、友達と一緒に近所の掃溜へ首を突込み、鮭の頭をしゃぶったり、とおりがかりの知らん犬と喧嘩したり、屑拾いの風体を怪しんでおとりかこんで吠付いたりした事もないが、これは皆友達を見よう見真似にそのG尻馬にのつて、訳も分らずに唯騒ぐので、ポチにちつとも悪意はない。であるから、独りの時には、やっぱり元の無邪気な人懐こい犬で、とぼけた面をして他愛のない事ばかりして遊んでいる。おもうに、私等親子のいつくしみを受けて、かつて痛い目に遭つた事なく、のんきに安泰に育ったから、それでこんなに無邪気であつたのだろうが、ああ、想出しても無念でならぬ。何故私はポチを躱けて、人を見たら皆悪魔と思ひ、一生世間を睨め付けては居させなかつたらう？ なまじ可愛がつて育てた為に、ポチはこんなに無邪気な犬になり、無邪気な犬であつた為に、遂に残忍な刻薄（※2）な人間の手に掛つて、あんな非業の死を遂げたのだ。

或日の事。さもしい事を言うようだが、其日の弁当の菜は母の手製の鯉節でんぶで、私も好きだが、ポチの大好きな

物だったから、我慢して半分以上残したのが、チャンと弁当箱に入っている。早く帰ってこれがたべさせたかったので、まちこがれた放課の鐘が鳴るや、大急ぎで学校の門を出て、友達は何の通り皆道草を喰っている中を、私一人はせっせと帰って来ると、にわかに行手がワツと騒がしくなつて、先へ行く児が皆雪崩で、ドツと道端の杉垣へ片寄つたから、驚いてヒョイと向うを見ると、ツイ四五間先を荷車が来る。ちらと見たばかりでは何の車とも分らなかつた。何でも可なり大きな箱車で、上から菰をかぶせてあつたようだったが、それを若い土方風の草鞋ばきの男が、余り重そうにもなく、さつさと引いて来る。車に引添うてまた一人、四十ばかりの、四角な面の、もじやもじやと髭の生えた、人相の悪い、やつぱり草鞋ばきの土方風の男が、古ぼけて茶だか鼠だか分らなくなつた、ほこりだらけの鉢巻もない帽子を阿弥陀(※3)にかぶつて、手ぶらで何だかしやべりながら来る。

道端の子供等は皆好奇の目を円くして此怪し気な車を見迎え見送つて、何を言うのか、口々にがやがやとわめいている中から、たちまち一段際立つて甲高な、「犬殺しだい犬殺しだい!」という叫声が其処此処から起る。と聞くより、私はハツとした。全身の血の通いが急に一時に止つたような気がして、襟元から冷りとする、足がすくむ……と、たちまち心臓が破裂せんばかりに鼓動し出す。「ポチは? ……」という疑問が曇つたような頭の中で、ちらりといわずまのように閃いて又暗中に没する時、ガタガタと車が前を通る。

後で聞けば、菰の下から犬の尻尾とか足とかが見えていたというけれど、私が其時きつと目を据えて視たのでは、ただ車が躍つて菰が魂の有るようにゆさゆさと揺れるのが見えただけで、他には何も見えなかつた。Hあるいはもう目も霞んでいたのかも知れぬ。

「『おッそろしい餓鬼がきだなあ！　まだあんなに出て来やがら……』」

と太い煤すすけたような野良声で、——確に年上の奴やつに違いちがいが、そう言うのが聞えた。
ガタンと一つ小石に躍はって、車は行過ぎてしまう。

跡あとは両側の子供がまたぞろぞろと動き出し、あたりが大黒帽だいこくぼうにかすりの衣服きものでごたごたとなる中で、私一人は立ちどまつたまま、茫然ぼうぜんとして轅棒かじぼう（※4）の先で子供の波を押分おしわけて行くように見える車の影かげを見送かっていた。

と、J誰だれだか私のそばへ来て、何か言う。顔は見覚えのある家うちの近所の何とかいう児こだが、言ってる事が分らない。私は黙もくってその面かおを視みたばかりで、又そつと車の行つた方角を振向ふりむいて見ると、もう車は先の横町を曲つたと見えて、こちらを向いて来る沢山たくさんの子供の顔が見えるばかりだ。

「ねえ、君、君ンとこのポチも殺されたかも知れないぜ。」

という声がその時ふと耳に入いって、私はハツと我にかえると、

「うそだい！　殺されるもんか！　札ふだが附ついてるもの……」

とあわてて打消はてから、K始めて木村の賢ちゃんという児と話をしている事が分つた。

「やあ……札が附いいてたつて、殺されますから。へえ。僕ぼくン所ところのおとつさんが……」

と賢ちゃんが言掛いけると、なかよしの友の言う事だが、私は何だか急に口惜くやしくなつて、かつとせきこんで、

「何なんでい！　大丈夫だいじょうぶだい！！　……」

と怒鳴どなり付けた。賢ちゃんがびっくりして眼を円くした時、私はいきなりバタバタと駈出かけだし、前へ行く児こにトンとつき

あたる。何しやがるンだいと、その児に突飛つとばされて、また誰だかにつきあたる。二三度あちこちで小突かれて、よろよろとして、あやうかつたのをやツとふんごたえるや、L後をも見ずに逸散いつさんに宙を飛で家へ帰った。

〔二葉亭四迷『平凡』〕

※1 掃溜……ごみを掃はき集めて捨てておく場所。ごみ捨て場。

※2 酷薄……むごく情けの心がないこと。

※3 阿弥陀……帽子の前を上げて斜ななめに傾かたむけてかぶること。

※4 轆棒……荷車の前方に長く突き出ている二本の棒ぼう。

問一 傍線部 A・C・D・G の本文中における意味としてふさわしいものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

A まだ一向にねんねえ

ア、何事にも怖がりこわで慎重しんちょうな性質

イ、言うことをきかないわがままな性質

ウ、幼稚ようちで成長が見られない性質

エ、おさなくて好奇心こうきしんにあふれる性質

C 歴とした家

ア、著名な人物の家

イ、品格と伝統のある家

ウ、古く傷んだ家

エ、和風建築の立派な家

D 大様

ア、おだやかでゆったりしていること

イ、まわりに寛容^{かんよう}で我慢強^{がまん}いこと

ウ、余裕^{よゆう}があり頼り^{たよ}がいがあること

エ、反応^{はんぷ}が鈍^{にぶ}く気がまわらないこと

G 尻馬^{しつば}にのって

ア、相手に対してとどめを刺^さす様子

イ、集団の後ろからついていく様子

ウ、控^{ひか}え目で周りの人に協調する様子

エ、分別もなく他人の言動に同調する様子

問二 傍線部Bの意味としてふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア、犬同士であれば、さらに互^{たが}いの距離^{きょり}が近づく

イ、人だけでなく、どこかに犬がいまいかと探しまわる

ウ、相手が同じ犬であれば、もっと喜んで近づく

エ、犬であれば、人以上にかわいがってくれる

問三 傍線部Eについて、この時の「ポチ」の心情として考えられるものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア、本当は自分のものなのに食べさせてくれないなんて、ひどいぞ。

イ、やっぱり自分のものを分けてあげるべきではなかったのだな。

ウ、あれ、なんで怒っているのだろう。自分も食べたいな。

エ、そんなにお腹がすくものなのかな。いいや、後でまたもらおう。

問四 空欄Fを補うのにふさわしい言葉を本文より抜き出して答えなさい。

問五 「私」が「ポチ」をいとおしく思っていることがわかる行動を、本文の言葉を使って三〇字以内で説明しなさい。

問六 傍線部H「あるいはもう目が霞んでいたのかも知れぬ」とは、一定の時間を置いた後で当時の場面を振り返った時の表現です。この表現からわかる「私」の心情としてふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア、目の前を行く車が見えるだけで、一体、何が起きたのかがわかっていなかったのかも知れないということ

イ、最も想像したくない嫌な予感が頭に走り、結果を予測していた面があったのかも知れないということ

ウ、草履ばきの男の迫力ある言葉に圧され、怖くなってしまっていたのかも知れないということ

エ、「犬殺しだい!」という言葉聞いて、同じ犬を飼う者として恐怖と同情を感じたのかも知れないということ

問七 傍線部Ⅰについて、これは「土方風の草履ばきの男」の発言ですが、彼は、何を指して言っているのですか。ふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア、自分たちのことを「犬殺し」などとかかってわめき声を上げる子どもがいる中で、さらに多くの生徒が非難しに集まってくる様子

イ、放課後、学校から多くの生徒が下校する時間と重なり、「犬殺し」と叫ぶ子どももいる中で、さらに多くの生徒が学校から出てくる様子

ウ、安全に前進したいのにも関わらず、「犬殺し」などという身に覚えのないひどい言葉を投げかける子どもがどんどん増えていく様子

エ、子供たちが荷車に群がり、「何が乗っているのか」と興味津々で集まってくる中で、さらに多くの生徒がこちらにむかって来る様子

問八 傍線部 J と傍線部 K との表現の違いの説明として、ふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア、J では不安のため頭が真っ白になっているのに対し、K では次第に目の前の状況^{じょうきょう}を理解し始めたことで、相手が

「賢ちゃん」だとわかった

イ、J ではまわりの騒がしさに驚き混乱しているのに対し、K では気持ちが落ち着いてきたことで、相手が「賢

ちゃん」だとわかった

ウ、J では車を見ることに集中していたのに対し、K では車が去ったことでまわりが見えるようになり、相手が「賢

ちゃん」だとわかった

エ、J ではまわりの騒がしさで相手の声がよく聞こえていないのに対し、K では少人数になったことで、相手が「賢

ちゃん」だとわかった

問九 傍線部Lについて、この時の「私」の説明としてふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア、ポチが連れ去られたことを確信し、そのいらだちから無関係な子どもにぶつかることで、自分のくやしさをまぎらわせようとしている

イ、「札がついていても殺される」という「賢ちゃん」の残酷な言葉が信じられず、賢ちゃんのお父さんから本当のこ
とを聞きたいとあせっている

ウ、根拠もなく「大丈夫だい!!」と言った自分が恥ずかしく、いたたまれない気持ちになり、早くこの場から離れて一
人になりたいと願っている

エ、「賢ちゃん」には強がってみせたものの、あの車にポチが乗せられていたのではないかという不安が高まり、一刻も
早く家に帰ってポチに会いたいと思っている

問十 この作品は、明治四十一年（一九〇八年）に発表されたものです。今から一〇〇年以上前の作品が現在においても
読み継がれているのは、どのような点に魅力があるからだと考えますか。四十五字以内で説明しなさい。

三 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

文学は実生活で役に立たないという、いささか荒^{あら}っぽい通念があります。いちいち相手にするほどの考え方ではありませんが、文学の入口の話をするとなれば、やはり少し触^ふれておきたいと思います。たしかに文学は現実の生活ではとり立てて多くの利益を生むものではありませんから、市場の現実的価値というレベルだけで見れば、たしかにそれは否定できないことでしょう。

でも、そのような見方^{みかた}で、何か変^いだな^{わかん}な^{かん}って、違和感^いが^{わかん}ありませんか？ あまりにも単純な考え方をしている気がして。結論から先に言^いってしまえば、文学というものは、A そのような問題の前提^{ぜんてい}そのものを疑^ううのです。つまり、〈役に立つ／役に立たない〉という二つの区分が絶対的に存在しているような発想^{はつしやう}で本^{ほん}当^{とう}な^なの^のだ^だら^らう^うか？ 「B そもそも、そのような分け方^{わけかた}っておかしくない？」と問題設定の有効性を疑います。問題の前提^{ぜんてい}そのものを突^つき^く崩^{くず}すわけ^{わけ}です。役に立つとか立たないとか、そうした乱雑な分け方^{わけかた}をする発想^{はつしやう}がいかに浅薄^{せんぱく}なものであるか、文学はフィクションつまり虚構^{きよこ}の言語^{ごんご}によって、新たな現実^{げんじつ}をつきつけるのです。

世の中に流通している価値観への疑念^{ぎねん}と言^いってもよいかもしれません。わかりやすいのは、たとえば善^{ぜん}と悪^{あく}みたいなの^のでしょう^うか。文学は何^{なに}が善^{ぜん}で何^{なに}が悪^{あく}なのか、モラルの判断^{はんぱん}を示^しす^すこと^{こと}も^もあ^あり^りま^ます^すが、たいていそうした作品はおもしろくない。世の中の常識や社会通念では、悪となつていくけど、本当にそうだろうか、あるいは皆^{みな}が当然^{たうぜん}のように善と考^ええているけど、何か変^いだな^{わかん}、むしろ悪^{あく}とか善^{ぜん}とか、そういう決^{けつ}め^めつ^つけ^け方^{かた}こそ問題^{もんだい}が^あり^りそう^うだ^だな^なとい^いつ^つた^たよ^よう^うに、文学が描^{えが}き出^でそうとするのは善^{ぜん}と悪^{あく}の単純な構^{こう}図^ずをこえた向^{むか}こう^{こう}が^がわ、ニーチェの本^{ほん}の題^{だい}名^{めい}を使^{つか}えば〈善^{ぜん}悪^{あく}の彼岸^{ひがん}〉とでもなりま^ます

か。

ですから、C文学とは日常の当たり前に思える発想を揺さぶる不穏なものでもあります。楽しいものであるけれど、場合によっては日常を裂く破壊的要素を隠し持っていることがあります。そうしたことが丸ごとおもしろいのです

あるいは大きく譲って、〈役に立つ／役に立たない〉という発想にそって考えたとしでしょうか。それでも、この〈役に立つ〉という言葉のはらむ、人間存在の根本に関係した問題をひどく「D」しているように思います。私たちは刻一刻と何かを感じ、考えながら生きています。文学はそうした思考と情動に深く関与する営みです。生きることそのものと不即不離の関係にあると言っても過言ではありません。

ですから、文学は政治的あるいは経済的な事象や通念の前提に問いを突きつけることもあるし、そういうことでは、E文学に限らず芸術はいつも既成の制度を挑発するものにちがいないのです。

「文学の楽しさはどこにあるのか」という問題の趣意は、そうしたことを含みます。ですから、問いそのものは「F」ですが、そこからいつまでもたつても卒業することのできない「G」なテーマでもあります。

もちろん、多くの問いが終わりなきものでしょうし、この世界には常に問いかけ続けるしかないような事柄が積み重なっています。

H必ずしも答えを必要としないような問いかけというものがあります。一問一答式のように進んでいかない、〈問い／答え〉がセットになった二進法の機械のようにには働かないという、文学こそそういうものの代表です。その際に大事なものは「上手に問う」ということではないでしょうか。

別の言い方をすると、オリジナルな問いを立てることです。J誰にも思いつかないような意表をついた問いには、その独自性にあふれた問いであること自体、すでに「答え」が入っているに等しいのです。

文学の問いには正解がないように思えるかもしれませんが、でも、ある問かけが、答えが出ないまま時間ばかりがたっているように感じられたにしても、実は問いがさまざまに分岐して別次元の問いを生みだしているはずで、そうした思考の継続的な運動こそ、想像力の礎をなすものだと思います。

〔中村邦生『はじめての文学講義』〕

問一 傍線部 A について、「そのような問題の前提」の例としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、物事をメリット・デメリットに分けて行動することが、生きる上で有効であるという考え方

イ、議論に勝ったか負けたかで物事の優劣を判断する利点は、時と場合によるという考え方

ウ、集団を「勝ち組」と「負け組」に分けることは、一面的なかたよった視点であるという考え方

エ、朝食を和定食にするか洋定食にするかで迷うことは、本人の自由であるという考え方

問二 傍線部 B について、これに最も近い意味を持つ表現を、本文より二〇字以内で抜き出しなさい。

問三 傍線部 C について、「文学とは日常の当たり前に思える発想を揺さぶる不穏なもの」と筆者が考える理由を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア、当たり前から距離を取ることは、自分の仲間や家族を疑いの眼で見ることにつながるから。

イ、当たり前を疑うことは、一般的にこれまでの常識とされていたことを覆す行為であるから。

ウ、当たり前を見直すことで、これまで自分が手にしてきた実績や評価を失う可能性が出てくるから。

エ、当たり前から離れることで、頼るべきものがなくなり、相談相手がいなくなってしまうから。

問四 波線部「皆が当然のように善と考えているけど、何か変だな」について、あなたが日常生活でこのように感じた経験を説明しなさい。

問五 空欄Dを補うのにふさわしい言葉を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア、単純化 イ、細分化 ウ、表面化 エ、理想化

問六 傍線部Eについて、ここでの「挑発」の意味としてふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア、相手をいらだたせること
イ、混乱させて迷わせること
ウ、多人数で圧力をかけること
エ、問いを突きつけること

問七 空欄 F・G を補うのにふさわしい組み合わせを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア、F、永続的 G、断片的

イ、F、論理的 G、基本的

ウ、F、多面的 G、瞬間的
しゅんかんでき

エ、F、入門的 G、応用的

問八 傍線部 H について、「必ずしも答えを必要としないような問いかけ」の例としてふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア、人はなぜ、生命あたまを与えられ、乳児期から離乳食期りにようしょくきをむかえ、次第に自分の力で食事を摂とれるようになるのか。

イ、人はなぜ、いい学校を目指し、いい就職先を探し、一軒家いっけんやを持つてペットを買い、外国車を乗り回したがるのか。

ウ、人はなぜ、日々の暮らしを続け、その中で誰かだれを好きになつたり、誰かのために尽くつくしたいと思つたりするのか。

エ、人はなぜ、権力や名声、地位、手柄てがらを得ても、年を重ねるにつれて次第に衰おとしろえて身体からだの自由が利かなくなるのか。

問九 傍線部 J について、「誰にも思いつかないような意表をついた問い」を作り出すためには何が大切だと筆者は言っていますか。その答えにあたる箇所かしよを、本文から十字以内で抜き出して答えなさい。

問十

二と三を讀んだ上で、あなたは「文学」にはどのような力があると考えますか。三十五字以内で説明しなさい。

